

埋文にいがた

MAIBUN

新潟県埋蔵文化財センター

MAIBUN
NIIGATA

2020 Sept.

第112号

発掘調査
整理遺跡
紹介

上越市館遺跡、南魚沼市六日町藤塚遺跡・坂之上遺跡
催事紹介 令和2年度秋季企画展「越後争乱ノコト」



上越市下割遺跡の調査風景



令和2年度 発掘調査 遺跡の紹介

上越市舘遺跡 — 古代と中世の集落 —

所在地：上越市駒 林字舘
（じょうえつしこまはやしあざたて）

舘遺跡は、国道253号上越三和道路建設に伴い令和元年度から発掘調査を行っています。高田平野のほぼ中央で、標高約15.8mの自然堤防上に位置します。遺跡は上層面が古代～中世、下層面は古墳時代に営まれたムラで、延面積5,256㎡を発掘調査する予定です。今回は、上層面の古代～中世の調査成果を報告します。

上層面は12世紀が主体で、建物の柱穴、井戸、の跡などが見つかりました。柱穴の形は四角と丸があり、前者は古代、後者は中世の建物の柱穴と考えます。古代の柱穴は限定され、配置を検討した結果、掘立柱建物2棟を確認しました。1つは柱間が2間×4間、もう一つは2間×3間で、いずれも柱穴は長方形です。調査区のほぼ中央にあり、長軸方向が同じため同時期に存在していたと考えられます。2棟確認した掘立柱建物では、柱の抜き取った痕が確認されました（写真1）。いずれも、外側に柱を倒して抜き取っていることがわかりました。他の遺跡では柱穴に残る例もあり

るため、全ての柱が抜き取られたわけではありません。ただし、地上に出ていた部分のみが切り取られたことも想定されます。本遺跡では、なぜ柱が抜き取られたのか。様々な理由が考えられますが、木材を有効に利用するためということが大きかったと考えられます。

井戸は9基確認しました。直径80～90cm、深さは1m以上あるもので、すべて素掘りの井戸です（写真2）。井戸の1基からは、埋土から鉄滓と轆の羽口など製鉄にかかわる遺物も出土していることから、近くに鍛冶工房が存在したと思われる。

掘立柱建物1の北東側にある土坑からは、12世紀の土師器の皿が見つかりました（写真3）。県内では12世紀の遺跡は決して多くないため、貴重な資料が得られました。今後調査が進むと、時期別の遺構の配置や細かな年代が分かってくると思われます。

（飯坂盛泰）



写真1 柱抜き取り痕跡

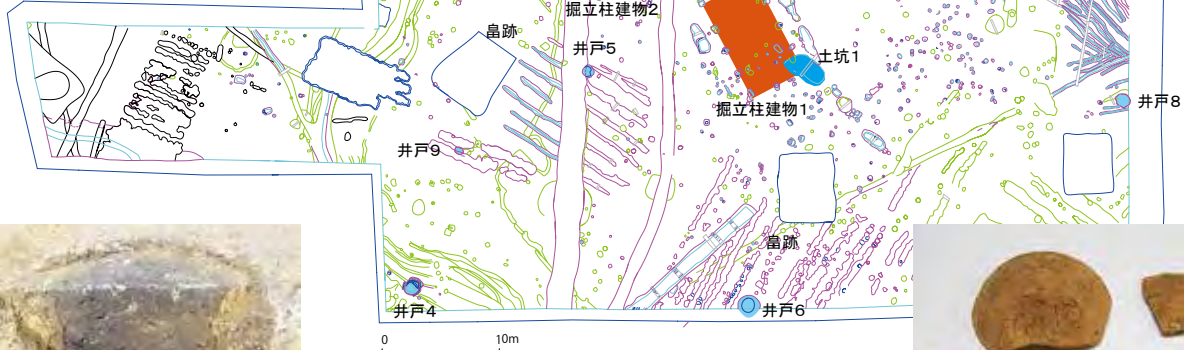


図1 遺跡全体図



写真2 井戸の断面



写真3 土坑出土の土師器



令和2年度
整理作業
から

六日町藤塚遺跡・坂之上遺跡

—土器捨て場から祭祀行為を復元する—

所在地：南魚沼市余川字藤塚ほか
みなみうおぬましよかわあざふじづか

現在整理中の南魚沼市六日町藤塚遺跡・坂之上遺跡は、今から約1,500年前、古墳時代中期から後期の遺跡です。遺跡からは、土器の破片がまとまって出土する場所「土器集中遺構」が多く見つかっています。これらは、壊れたりして使わなくなった土器を捨てる「土器捨て場」であると考えられます。その一つ「SX44」と呼ばれる遺構には、地元で作られた土器（土師器）と一緒に須恵器と呼ばれるねずみ色の甕が2点含まれていました（図1）。須恵器は当時、近畿地方や東海地方など限られた地域で作られた高級品で、交易品として各地域の首長層へ流通していたと考えられています。

さて、この須恵器甕を元の形に復元して細かく観察してみると、いくつか不思議なことに気づきました。まずは、いずれの甕も底の方が赤く変色している点です（図2）。これは、この甕が火に掛けられて熱を受けたことを示します。変色した位置や範囲から考えて、焼けた石の上に正位で置かれたと考えられます。須恵器は保水性に優れた焼き物である反面、熱を受けると変質してしまい

脆くなるため貯蔵容器として利用されることが多く、通常火に掛けたりはしません。普段とは異なった使われ方をしているのは間違いありません。

さらに復元作業を進めていくと、破片の表面に固いもので叩いた痕跡が多く確認されたほか、口の部分だけが打ち欠かれて残っていないことがわかりました（図2）。これは二つの甕が自然に割れたのではなく、意図的にかつ入念に破壊していることを物語っています。

ここまで明らかになった点を踏まえると、次の行為が復元できそうです。まず、①土器集中遺構（SX44）とは別の場所で、火と土器を用いた祭祀行為を行う。②祭祀行為で使用した土器を破壊する。③破片になった土器をこの場所（SX44）に廃棄する。つまり、「土器集中遺構」が単なる土器捨て場ではなく、祭祀行為に伴う遺構であることがわかります。今回の事例は、現地作業ではわからなかった祭祀行為から廃棄までの一連の流れが、整理作業を通じて明らかになった好例といえます。今後、整理作業を進める中で、さらなる発見があるものと期待されます。（田中祐樹）



図1 SX44（土器集中遺構）検出状況



口縁部拡大



底部拡大

図2 SX44から見つかった須恵器甕
口縁部が打ち欠かれて残っていないことや底部が熱を受けて赤く変色しているのがわかります。



埋文 コラム

高杯について — 食器の移り変わり —

鉢・碗・杯・皿形に長い脚がつく器を高杯と呼びます。中国の歴史書で、弥生時代後期の風習などが記された魏志倭人伝には、倭人は籩豆（＝高杯）を用いて手食したとあります。この時代の中国は、食台や膳に並べた銘々器（個人の食器）から匙や手で米飯を食べていたため、倭人が高杯から手食していたのが珍しかったと思われます。

高杯は縄文時代には存在せず、水田稲作の定着から普及したため、米飯（雑穀やイモ類を混ぜたカテ飯を含む）に伴う食器と考えられます。新潟県では弥生時代後期から土器が増加します。木製高杯は長岡市大武遺跡で確認できますが、ごくわずかです。県内で、高杯が木製か土製かの判断は難しいのですが、他県の状況から弥生時代後期～古墳時代中期前半（約2,000～1,600年前）は、土製が主体という研究成果もあります。

弥生後期～古墳時代中期の土製の高杯は、土鍋や壺など土器全体での比率や、大きさが変化します（表1）。弥生時代後期～古墳時代前期では、大型が多く、古墳時代中期には小・中型が多くなって土器全体での比率も高まりますが、古墳時代後期になると比率は大きく低下します。研究の途上

ですが、大きさの変化は家族のみんなで高杯に盛られた米を食べていたものが（共有食器）、古墳時代中期には個人用（銘々器）となり、小さくなった可能性があります。古墳時代後期に比率が低下するのは、調理場が関係しているとの仮説が提示されています。古墳時代中期前半まで、家の中央にある炉を囲んで食事をしていました。炉にはオキ火を保温するため多量の灰が必要で、その灰の混入を防ぐため、置き食器で脚台のある高杯が有効だったとする考えです。新潟県では導入が遅いのですが、古墳時代の中期後半には調理場が家の奥にあるカマドが出始め、食器も手持ちの小さな碗・杯が主体となります（写真1・2）。

食器、調理場、調理具、米の炊き方など多方面から仮説を検討することで、当時の食事の様子が分かってくると考えられます。（滝沢規朗）

表1 県内の時代・時期別の高杯

時代等	比率	大きさ	高さ
弥生後期	10%	大・中型	15～20cm
古墳前期	未満	が主体	が主体
古墳中期	30%	中・小型	10～15cm
古墳後期	5%	小型主体	10～15cm



写真1 調理場（火どこ）の違い



写真2 時期ごとの主な食器の違い



埋文 インフォ メーション

令和2年度年度秋季企画展 越後争乱ノコトー発掘された白河荘ー

本展は、現在の阿賀野市および新潟市北区の一部あたりに成立した中世・白河荘の遺跡に焦点をあて、その歴史に迫るものです。荘園とは、奈良時代から戦国時代にかけて存在した中央貴族や寺社による私的大土地所有の形態です。個人の開墾や他人からの寄進で大きくなりましたが、鎌倉時代末期以後、武士に侵害されて衰え、1467年からの応仁の乱、1582年の太閤検地により消失しました。白河荘は1134年に皇嘉門院領として成立したとされています。

白河荘内では、阿賀野バイパスに伴う発掘調査などで、多くの遺跡の発掘調査が行われてきました。特に、県教育委員会による発掘調査は規模が大きいことから、遺跡の繁栄から衰退時期の推定が可能なことや、見つかった遺構（建物、井戸、墓など）と出土品から、その遺跡の役割や格を検討することが可能となってきました。

発掘調査で得られた考古学の膨大な情報と文献資料を比較・検討することで、当時の生活を読み解く多くの成果が得られています。発掘調査で建物の大きさや構造、道具の組合せや使い方、食べ物の種類、埋葬方法、阿賀野川の流路の変化、百津潟を介した河川交通と陸上交通の繁栄が分かりました。文献史料との対比では、例えば、11世紀中ごろから12世紀末を主体とする大坪遺跡と1201年に討伐された越後平氏である城氏との関連、15世紀前半で衰退する堀越館跡や境塚遺跡と1423年に勃発した応永の大乱、新町遺跡が衰退する16世紀初頭と越後の戦国時代の開始など。様々な情報を組み合わせることで、研究途上ながら白河荘の実態に迫ることが可能となった点が特徴です。

展示で注目いただきたいものの一つが、境塚遺跡の大型井戸で使われた板材です。展示は10枚の板が接合したもので、観察の結果、新材が使われていたことが分かりました（写真3）。この井戸の近くには大型の建物があるため、身分の高い人は大型の井戸に新材で方形に縦板を組んで構築し

ていることが分かりました。使われていた道具は、なつかしさを抱くものが多いのもこの時代の特徴です。戦乱が続く厳しい時代を生き抜いた先人の技術・知恵を、是非、県埋蔵文化財センターで感じてください。（滝沢規朗）

◆ 期 日：令和2年12月13日(日)まで

◆ 観覧料：無料



写真1 大坪遺跡
高麗青磁



写真2 境塚遺跡
一括出土銭



写真4 堀越館跡
装飾付硯



写真3 境塚遺跡大型井戸・縦板



県内の
遺跡・遺物
110

にいぼじょうあと
新穂城跡

昭和48年3月29日 新潟県指定史跡

遺跡所在地：佐渡市下新穂

遺物保管：佐渡市（佐渡市立新穂歴史民俗資料館）

新穂城跡は、佐渡国中平野のほぼ中央部に位置し、大野川・国府川流域の扇状地末端部に立地しています。

単郭単濠平館形式の館跡で、水濠の一部は昭和中期の道路拡幅等により埋められましたが、保存状況は比較的良好です。郭内の規模は南側郭縁で約90m、北側約80m、南北約80mと、およそ方形のプランを呈します（写真1）。水濠の幅は約10～15mです。土塁の跡は認められませんが、郭縁四周（水濠と郭の間）の幅2mがドシャゲ場と呼ばれ、これが往時の土塁と考えられます。

水濠の内側は「城内」と呼ばれ、館跡の周囲には「表」「横道」「中道」など、館に関連する地名が見られます。館跡の北西には観音堂が置かれています。

郭内では、土師器・須恵器・珠洲焼・瓷器系陶器が出土しています。中世の遺物で時期が特定できる珠洲焼のすり鉢口縁部片は、口径約34cmで口縁端部をやや内傾して面取りし、波状文を施すものです。珠洲V期の特徴をそなえ、14世紀末

から15世紀中葉と考えられます（写真2：左下の2片が瓷器系陶器、他は珠洲焼）。

同形態の館跡は、新穂城跡東方の青木城跡（県指定史跡）や北方城跡など複数確認されています。これらは、中世に成立した地頭配下の一村落を代表する土豪「村殿」の館跡と考えられ、本遺跡は新穂殿の館跡とみられています。新穂殿は、文安5（1448）年、本間季直ら四名連署証状に「新穂有時」の名が見られますが、詳しいことは明らかではありません。

現在、郭内には数戸の住宅が入り、小環濠集落の観を呈しています。水濠はハスが生き茂り、春にソメイヨシノ、夏にハスの花が咲き誇る様子は地元で親しまれています（写真3）。

（佐渡市世界遺産推進課 滝川邦彦）

【参考文献】

新穂村史編纂委員会1976「新穂村史」、田中圭一・山本仁1981「佐渡文化シリーズ 佐渡古城史 下」、新潟県1986「新潟県史 資料編24 民俗・文化財三文化財編」



写真1 新穂城跡航空写真



写真2 出土遺物（中世陶器）



写真3 新穂城跡近景



埋文にいがた 第112号

令和2年9月25日発行

発行 新潟県埋蔵文化財センター Niigata Prefecture Archaeological Research Center

指定管理者：公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 TEL：(0250)25-3981 FAX：(0250)25-3986

E-mail：niigata@maibun.net URL：https://www.maibun.net/



『埋文にいがた』のバックナンバーは（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 HP でご覧いただけます。
上の URL からご確認ください。